

課題： 贈与の伝播と沖縄大学の再生

- ・ ペンシルバニア大学コールセンターのケース：
 - オペレーターの仕事は大学の卒業生に電話をかけて寄付金を募ること。90%以上の人からは冷たく断られる。経験豊かなオペレーターですら燃え尽きやすい過酷な仕事。

「この職場で良い仕事をするのは、黒いスーツを着てお漏らしするようなものだ。温かい気持ちにはなるが、誰にも気づいてもらえない。」
 - ある日、奨学金を受けた学生が直接オペレーターを尋ね、感謝溢れる感動的な手紙を披露し、オペレーター全員に心からのお礼を伝えた。

「本学の学費は私にとってとても高額なものです。それでも、私はこの大学で心から学びたかった。なぜならば、この大学は私の血液も同然なのです。私の祖父母はこの大学で知り合い、私の父と4人の兄弟も本学で学びました。私の弟も、本学のおかげで生を受けました。…彼は本学がNCAAのトーナメントで優勝した日に身籠ったのです。今までずっと、本学で学ぶことが私の夢でした。ですから、奨学金を頂戴してどれだけ嬉しかったか、とても言葉では言い表すことはできません。この素晴らしい機会を決して無駄にしないよう心に誓っています。この奨学金が私の人生をどれほど豊かにしたでしょう…。」
 - 直接学生と会い、自分たちの仕事が誰かの役に立っているという実感が生まれたことで、オペレーターの心に火がついた。1時間あたりの電話数は2倍になり、毎週の寄付件数は144%増加。毎週412ドルだった寄付金額が2000ドル以上へ、収入は実に5倍になった。結果として、奨学金の受給者と5分間のミーティングが、23人のオペレーターの心に火をつけ、わずか一週間で38,451ドル(約400万円)の追加的な収入を生み出した。
- ・ 多くの職業の中でも、教員は鬱の発症率が特に高い。希望した職業、安定した地位と報酬、やりがいのある仕事、尊敬される立場…。一見理想的な職業でありながら、なぜ教員は心を病んでいくのだろうか？また、日本全国で教員の鬱がもっとも多いのは、沖縄県である。その他の県に比べると、沖縄県は特に教員の社会的な地位が高いのに、なぜ、このような現象が生じるのだろうか？
 - 教員志望者は、自分の努力が成果を生み出すまでには時間がかかるため、モチベーションを維持することが難しく、燃え尽きやすいと考えられる。沖縄大学のあるベテラン教員の言葉、「教員の仕事を長年続けていると、心が擦り切れてしまう」。
 - 教員は誰からも評価されない仕事。上司はいない、報酬も変わらない、成績も上がらない、出世もしない。唯一の報酬は、学生の成長を見届けることと、学生からの感謝の一言である。

- ・ 2013年後期ゼミの課題：
 - 沖縄大学の教員・職員への(クリスマス)プレゼントとして、贈与をパワーに変えるプロジェクト。
 - 沖縄大学のすべての教員、職員が対象(樋口を除く)。1名またはそれ以上の方々へ、心を尽くして書いた感謝の手紙を贈ることで、教員、職員へパワーを贈ることが目的。
 - この後期課題は、1年から3年生までの、私のゼミを受講する学生約100名に共通である。100名の学生が、同時に沖縄大学の教員、職員へ感謝の手紙を贈ることになる。
 - 教職員の心に火がつけば、全学の授業、教務が変わり、沖縄大学全学に波及効果が及ぶ。そして、そのパワーは学生たちに戻って、学生自身を幸せにする。自分が放った思いやりの矢が、増幅して自分に戻ってくることを実感する。
 - 自分が楽しくなれば、授業が面白くなり、眠らなくなり、大学が好きになり、先生が好きになり、自分が好きになり、学ぶことに意味が生まれ、人生が豊かになり、社会に波及効果を及ぼす。贈与の行動がどのように人を変え、自分の心を変え、人間関係を変え、大学を変えるかを観察し、体験する。本課題は、私たちの心を通じて沖縄大学を再生するプロジェクトでもある。

- ・ 手紙を渡した前後の顛末、気づいたこと、経験などをまとめる。あなたの手紙を添付して提出のこと。

- ・ 提出方法：
 - 課題〆切： 12月26日(木)午前6時まで。
 - メールにて、樋口(higuchi @ okinawa-u.ac.jp)まで送付のこと。
 - メール表題に、「演習名」「提出者名(あなたの氏名)」を表記のこと。
 - 原則として、ファイルを添付せず、メールに直接原稿をコピー&ペーストしたものを送付のこと(多数のメールを私が確認しやすいため。画像などを添付し、メールに直接ペーストしにくい場合などはこの限りではない。)

2013年11月17日掲示